

丘の家

けれど、感傷に浸る間はなかった。チャルーが唾を飛ばしながら喋りまくっているからだ。

「俺、家についたら、ペニヤッツ酒を飲むぜ。それから、寝台がどれくらい跳ねるか試して、夜中まで起きる！」

「ペニヤッツ酒？」クワールンは首を傾げた。

「おうよ！ 送ってくれて、フロリラに頼んだんだ。お前も、なにか送ってもらうだろう？」

「『尾骨獣の大戦』を送ってもらう」と言いたかったが、チャルーは、「クワールンにも一杯やるよ！」というので、またペニヤッツ酒に話題は戻った。

「ペニヤッツ酒って、なに？」

とたん、チャルーは、ぎよつと身を引いた。

「知らないのかよ!? 柑橘の王ペニヤッツ、それを、ぎゅってやって、めっちゃうまくて、最高に美味しい酒にしたのが、ペニヤッツ酒だ！ 見習いから飲めるって、知らないのかよ!？」

「うまい」と「おいしい」は同じ意味だったが、そんなこと今のクワールンに

はどうでもよかった。チャル―がやたら物を知っていることに驚いていた。

「君、何でも知ってるんだね」

「まあな！」

「もしかして、ペニヤッツ酒のことも、前の〈育ての者〉から教わったの？」

チャル―は、顔を強張らせた。

「フロリラに送ってもらうのは、特大のやつだから、毎日宴ができるぞ！」彼は座り直して言った。

「そう。……楽しみだな！」クワーレンも座り直した。

チャル―は、延々と喋り続けた。彼にとって、喋らないことは、呼吸をしないのと同じようだった。彼は、だれかれ構わず喋りかけ、あつという間にみんなの中心になった。

馬車は、太い円柱の門をくぐった。

「さあ、ここから、見習いの村に入るぞ」御者がだるそうに大声で言った。

エイゼンドウーラ小道というところで、見習い三人が降ろされた。小道の脇に、小さな木の家が建っている。3000番地、そう扉に書かれていた。

馬車はそれから、中心部へと南下した。

「おっちゃん、どこの番地が一番いいの？」チャル―が訊ねた。

「中心部の、3500番からが、住むには都だな」

その番地になった見習いたちが、歓声を上げた。

「3015番地は！？」とチャルー。

「よくもねえし、悪くもねえ」

馬車は石を踏み越えて、がたんと揺れた。

「どうなの、それは？」クワーレンはぼそつと言った。

「……まあまあいい感じってことだよ」

チャルーは言ったが、半分自分に言い聞かせているようだった。

見習いをどんどん降ろしながら、馬車はついに村の中心部へ入った。

その騒がしさと言ったら、ハチの巢の中のようなだった。笛を吹く者、太鼓を鳴らす者。隣で踵を打ち鳴らして踊る者。

石灯いしひに照らされた白い円柱の家々は、窓からこちらを見る先輩見習いたちの顔をのぞかせた。

ほとんどの家の庭では、宴が開かれていた。両手と両肩、頭に料理や菓子をつけた見習いが、友人たちの間を歩く。みんな、口の周りに食べかすをつけながら、歌と笑いとお喋りで楽しんでいた。

「よお！ 見習いおめでどう！」

馬車が通り過ぎると、彼らは陽気に挨拶をした。

「僕らのところに来なよ！ 魚の蒸し焼きができたところだよ！」

「お隣の番地が空き家だよ！」

「最高の夜になりますように！」

彼らは気さくに、新米見習いたちに手を伸ばした。

すると、一人の少年が、馬車の前に躍り出て、縞々模様の長い喇叭を吹き鳴らした。とたん、ぶるぶるぶると変な音が響き、みんな大爆笑した。

「こら、どくんだ、カリュー！」

御者は言いながら、一つの家の前で止まった。

3607番地。

この番地になった見習いは、割れんばかりの雄たけびを上げた。

「ずるいずるい！」チャルーや他のみんなは抗議した。だが、御者は無視して、

さっさと3607番地の見習いを降ろした。

「やあ、グーマー！ 久しぶり！」

さつき縞々喇叭を吹いた少年が、かすれた声で御者に挨拶した。彼の後ろには、たくさんの見習いたちが、くすくす笑っていた。

「よお、カリュー。この前のリルクの脳みそ（エイネーの珍味。リルクは魚の一種）ありがとよ。激辛香辛料入りでな」

カリューと呼ばれた少年は、笑って腰に手をあてた。「どういたしまして！」
「忘れてねえからな、カリュー。お前、食いもんには気をつけとけよ。気づいた

ときには、尻の穴から火が出てるかもしれないからな」

カリユールと仲間たちは、ひゃあひゃあ笑った。

「ほれ、もうあっち行ってる、忙しいんだから」

「そんなこと言って、暇なんですよ、本当は」

「そう言うお前らも暇そうじゃねえか。だったら、こいつらの面倒をみてやってくれ」

グーマーは、3607番地の見習いを示した。カリユールは、口笛をピユイッと吹くと、「よし、じゃあ諸君、ついてきたまえ。ルードル鳥の照り焼きを食ってくがいい」と、彼らの肩に腕を回した。3607番地の子たちは、勝ち誇った笑みを、荷台の見習いに向けた。

とたん、彼らは、荷台から出るために押し合いへし合いした。クワールンもそれに押しつぶされた。「ぎゃあ!」

「おい、こら、出ていくんじゃねえ!」

グーマーは、見習いたちを押し返した。「あいつらざるいもん!」「鳥の照り焼き食べたい!」

「まったく、カリユールのやろう、また面倒起こしやがって……」

彼は御者台に飛び乗ると、ルードルの照り焼きから遠ざかるべく、急発進させた。

荷台の見習いは、それぞれの番地に降ろされて行き、とうとう最後はクワールンとチャルーだけになった。

北部に広がる丘陵地帯を進みながら、クワールンは言った。

「どうして、3015番地が最後なの？」

「いじめられてるんだ」チャルーがふてくされて言った。

「3010番から3050番地は、昔、村拡大計画のときに造られた家だからだ」

グーマーが言った。

「そんな時は、アベドが増えていたからな。でも結局、中心部の建物を高くして、そこに住まわせればいいってことになったんで、村拡大計画は、なしになったんだ。まあ、中心部から離れてるし、昼でも真っ暗なシルレイヤの森も近いから、進んで家を建てられることはなくなったんだよ」

「え！ そんな虚しいところなのかよ、ここ!？」チャルーは叫んだ。

「そんなことはねえよ。静かでいい場所だぜ」とグーマー。

「静かでいい場所だと……!？」

チャルーは、ぎろりと周りを睨んだ。丘の合間にぼつぼつと立つ家は、地味で貧弱そうだし、なにより、宴がなかった。

通り過ぎた家から出てきた見習いは、愛想よく手を振ってくれたが、それでもチャールは納得しなかった。

クワーレンは、グーマーの言ったシルレイヤの森というのが気にかかっていた。昼でも暗いシルレイヤの森。すすんで家が建てられなくなった理由の一つであるらしいが、自分たちはその近くに住んで大丈夫なんだろうかと思った。

「そんなしよげるんじゃないぜ。3015番地は建て替えられたって話だ。改装住宅に住めるなんて、いい話じゃないか」

グーマーの話には、否定できなかった。なぜなら、もう3015番地についてしまったからだ。

二人は、慌てて荷台からおり、新居を眺めた。

丘の家の中で一番外れにたつその家は、ずんぐりとした円柱形の、二階建ての家だった。屋根は、自分たちがかぶっている見習い帽子と同じように丸いが、雨風にさらされて、灰色になっている。

家の戸口までは、質素な小道が続いており、手入れを途中でやめたのか、それともこれが本来あるべき姿なのか、植木がかなり茂っていた。柵もなにもない。

戸口の明かりは既についており、古ぼけた木の戸に書かれている「3015」を怪しく照らしていた。

クワーレンとチャールは、唾を飲んで、この家がどれほどいい家なのか見極め

ようとした。

「じゃあ、達者でな！」

グーマーが、口笛を三回吹き、帰り始めた。クワーレンとチャルーは、急いで通りに戻った。グーマーは、仕事を終えて、意気揚々と鼻歌を歌いながら、丘を下っていった。

あたりはしんとした。どこかで虫が鳴いている。

少年二人は、麓の明かりを見つめた。

夜風が吹いてきた。クワーレンは呻いた。何もない丘の上で、自分たちは吹きさらしになっていた。あの暖かな保育部屋が恋しいと、一瞬クワーレンは思った。

「行こう。家に入る」

チャルーは、ため息をついた。

風が吹きすさび、粗野な家を前にして、二人は、惨めな気持ちになっていた。

クワーレンが中を覗くと、真っ暗だった。後ろからチャルーも覗き込む。

「……誰もいねえみたいだ」

「でも、おかしい。玄関の石灯いしひがついていたのに……」

クワーレンが言ってぞわっとした瞬間、上から「フフフフ……」と声がした。

「ぎゃあああああー！ー！ー！！」

少年二人は、我先にと外へ転がり逃げた。膝が震える。へなへな座り込む、ぽっかり開いた戸口からは、また笑い声が聞こえた。今度はもっと数が多く、しかも、何か小声で話していた。

「魔法動物だ！」

チャルーは叫んで、通りまで逃げ出した。

だが、その笑い声は大きくなり、やがて、こらえきれない少女たちのものになった。

クワーレンとチャルーは、顔を見合わせた。

「お前が先に行けよ」

チャルーは、クワーレンを押しした。

「ど、どうしてだよ」

「俺、膝すりむいちゃってさ」

見れば嘘だとわかったが、いまはそれどころではなかった。クワーレンは覚悟を決めた。友人として認められるべく、彼はがむしゃらになって「わーっ！」と叫びながら家に飛び込んだ。

誰もいない。

だが、上からまた笑い声が降って来た。見上げたクワーレンは、ぎよっとした。

梁に、三人の少女が座っていた。見習い服のせいでぼんやり白く浮かび上がる彼女たちは、まるで霧みたいだった。けれど、「あーあ！ おつかしい！ 逃げちゃったわよ！」とか、「苦しい、息ができない！」とか、「あーひゃっひゃっひゃあ!!」と涙を流して笑うので、クワールレンは、顔が熱くなった。

「やい、お前ら！ 脅かしやがって。あとで仕返ししてやるからな！」チャールは拳を突き上げた。

「待ってよ、チャール。彼女たち、先輩見習いかもしれない」クワールレンは、慌てて彼の肩を掴んだ。

「それはないわ。私たち、今日来たもん」

涙を拭って、一番右の少女が言った。帽子の下から、束ねた栗色の髪が覗いている。

「ああ、最高の見習いのはじめ方だね。このマウリンが、『やろう』って提案したんだよ？」

栗色の髪の子は、真ん中の少女を親指で示した。マウリンは、二つに結ばれた黒髪を払ってにやにや笑った。

「どうだった？ もしかして、お漏らししちゃったでしょ？」

それに、一番左の子が顔をしかめた。

「マウリン、そういうのはよくないわ」

彼女は、左の暗がりには消えたかと思うと、左の階段から姿を現した。

「ごめんなさい、悪気はなかったのよ。私は、エネーリス」

エネーリスは、肩のあたりで髪を切りそろえた、物分かりのよきそうな少女だった。まあるい目がおかしそうに輝いている。

簡単に自己紹介を済ませると、マウリンがだだだど階段を駆け下りてきた。

「マウリン！ あたしは、マウリンだよ！」

彼女は、胸に三本指を当て、手を突き出す、エイネーのくだけた挨拶をした。

「あっそう」

チャルーはむすつとしながら、彼女の手の甲を自分の手の甲で叩いて、挨拶を返した。クワーレンも同じことをしながら、もう一人の女の子を気にした。けれど。栗毛の女の子は、もう梁にいなかった。

「食事にしましょ！」

その子は、すでに家の奥にいた。「お腹ぺこぺこ！」

「彼女は、リリよ」

エネーリスが案内しながら言った。「私と彼女、保育部屋で近所だったの」

言いながらエネーリスは、長い棒を持って居間に入った。天井に差し向け、振ると、からからという音が鳴って、天井の石灯が、衝撃を受けて発光した。

家の中は、5人にちょうど良い大きさだった。左手に台所への入り口、右手に

は暖炉がある。チャルーはそれを見て、さっきの怒りは吹き飛んだ。彼は、暖炉に顔を突っ込み、「ほっほー！」と叫んだ。彼の声は、家中に響いた。

居間の真ん中には、灰色の大きな食事台があった。椅子が七つしまわれている。

「ね、素敵じゃない？ 今日からここで暮らせるなんて！」

エネーリスが言った。彼女に言われると、たしかに、この家はまんざら悪くない気がした。本棚もあるし、一つしかないけれど緑の皮椅子があるし、二階もあるし、吹き抜けは素敵だしで、クワレーンも気に入って来た。

マウリンがチャルーと同じことをして、家中が彼女の声で満ちた。

だから、栗毛のリリが、「うるさいっ！」と怒鳴った。彼女は、巨大な麻袋を台所から持ってきたところだった。

「守りの人からもらったの」

彼女は言った。「これが、今日の夜ご飯」

食事台にぶちまけられたのは、真っ青に熟れたナルウ苺や、大ぶりの柑橘バツサム、ポウ（エィネーで食される発酵パン）、米、数種類の乾酪、いろんな色の豆に、砂糖漬けされた果物、塩の入った小箱、砂糖の入った陶器、ごろごろと太った野菜に、燻製にした魚、牛酪、最後にペニヤッツ酒だった。

咄嗟に、チャルーは酒瓶をとった。

「やったぞ！ フロリラから送られてくる前に飲める！」

そこで、リリがなにかに気づいて言った。

「あんだ、勘違いしてない？ ペニヤッツ酒をお酒だと思っているでしょ」

「へ？」

「名前だけで、酒精は入っていないのよ」

チャルーは、ポカンとした。リリは呆れて、「酒精は、お酒の成分よ」と言った。

「嘘だ！ だって、ダリングは……」

「ダリングってだれよ」

しかし、チャルーはかたまって何も言わなかった。

リリは、そんな彼を放っておいて、食事の準備をりはじめた。その動作はじつに無駄がなく、まるで守りの人のようだった。

エネーリスは、そんな彼女に慣れているのか、ともに支度をりはじめた。クワレンも、とにかく動くことにした。見習いになったという自負が、そうさせたのだ。

台所に入ると、奥に竈が三つ並んでいた。食器棚は右にあり、流しは左側にあった。

「リリは、料理に詳しいのよ」エネーリスが、皿を取りながら言った。「まるでつくりの人みたいなんだから！」

「でも、あんなに包丁をうまく使うなんて」

クワールレンは、居間でポウを切るリリを眺めた。保育部屋を出たばかりにしては、上手すぎるような気がした。

居間に戻ると、マウリンがひっきりなしに喋っていた。

「でね、北熊^{ノール}学舎に行く途中に、胡坐をかいて眠ってるように見える岩があるんだけど、それは、〈追いかけ爺〉^{カウエントデイ}っていう魔法動物が、魔導師様にやっつけられて、岩になっちゃった姿なんだ！ だから、絶対に近づいちゃだめなんだよ！」

「これ、ぜんっぜん開かねえ！」

チャルーは、一生懸命、酒瓶を開けようとしていた。

クワールレンは、彼のもとに、ホルト（飲料を入れるための筒状の入れ物）を持っていった。

マウリンは、聞いているいないに関わらず喋り続ける。

「〈追いかけ爺〉^{カウエントデイ}は、岩になったことを怒っているの。だから、近づいてきた見習いは、片っ端から呪うんだって！ 呪われた見習いは、二度と口をきけなくなっちゃうの。……そう、〈追いかけ爺〉^{カウエントデイ}を、甘く見た罪でな」マウリンは最後、「けけけけ」と薄気味悪い笑いを漏らした。

「嘘よ、マウリン」皿を並べながら、エネーリスが言った。

「嘘じゃないよ！ 本当に口をきけなくなった見習いもいるんだから。そうや

って、魔法動物を軽く見ちゃだめだよ、エネーリス。やつら、心の中にも入りこめるんだから！」

「お前、一回、呪われてこい。そのお喋りな口を塞いでもらえ」

チャルーは、栓抜きをほじくるように動かした。マウリンがキーキー反論した瞬間、ぽんつと栓がとれた。

同時に、いままで真剣にポウや果物を切り分けていたリリが、「完成！」と叫んだ。

彼女の手により、食べ物は立派に盛り付けられた。みんなは、雷のように轟くお腹を、もうどうすることもできなかった。

クワーレンは、この瞬間が訪れるとは、夢にも思わなかった。同い年の子と食事をするなんて！　こんなこと、生きていてあるものなんだ！

けれど、みんなが席に座り、マウリンが「ちゃんとあたしの話、聞いていたの？」と言った、そのときだった。

上から、低い足音がした。

全員、動きを止めた。

「おい、お前だろ。騙されねえからな」チャルーが、マウリンを指さした

「あたしじゃないよ！　きっと、一番にここに来た子だよ」

恐くなったクワールンは、リリとエネーリスを見やった。「どうということ？」

少女二人は、気まずそうに顔を見合わせた。

「……とっつきにくい子だったわ」

リリが白状した。「だって、挨拶しても、なにも言わなかったんだもん、あい

っ」

「イムサっていう、男の子よ」エネーリスがこわごわ言った。「ひどいことをしちゃったわ。忘れていたなんて」

「この二人がこれだけ騒いでも降りてこないんだから、食べないわよ、きっと」

リリは、チャールとマウリンを指さした。けれど、迷いがあった。

「……僕、見てくるよ」

クワールンは言ったが。自分でも信じられなかった。

「なんだよ、いいやつぶってるのか？」チャールは彼にポウを突き付けた。「食いたかったら、勝手に降りてくるだろう」

「でも、知らないかもしれないよ」

実際、そういうことはクワールンにもよくあった。誕生月を祝う会するとき、知らないまま菓子が配られて、知らないまま終わっていたのだ。もちろん、意図的に知らされていなかったのだろうが、あれほど惨めな思いを、他の誰かにもさせ

たいとは思わなかった。

クワールレンは、階段を登っていった。みんなは、不安げに見送った。

吹き抜けからの明かりを頼りに、クワールレンは二階を見渡した。吹き抜けをすすりが囲んでおり、それを挟むように、左右に扉があった。

その右の扉が、閉まっていた。

クワールレンは、そちらへ耳をつけた。呼吸を抑える。

「なにか聞こえるか？」

後ろで声がし、クワールレンは叫んで飛び上がった。

チャルーがいた。

「なんでいつも脅かすんだ！」

「しーっ！ ほら、耳を澄ませてみる」

二人は黙った。

「ほら、なんにも聞こえねえだろ？ 逃げちまったんだ。窓から、ぴよって」

クワールレンは、じつと音を待った。たしかに足音は聞こえたはずなのに、いまはさっぱり静かだった。

「イムサ、食事をするから、気が向いたら降りて来いよ」

クワールレンは言ったが、反応なしだった。仕方なく、彼らは一階へ戻った。

はじめての3015番地での食事は、豪勢に行なわれた。それは、クワールレン

にとって、涙が出るほどの体験だった。もちろん、喜びすぎてでもあるが、岩羊の乾酪があまりにもまですすぎたというのも理由の一つだった。

ペニヤッツ酒は、チャルールの言った通り、めっちゃうまくて最高においしかった。柑橘の爽やかな風味が鼻孔を満たし、少しとろみがあるおかげで、優しい甘さが口の中で残り続けた。

調子に乗ったマウリンは、椅子に上ってこんな歌を歌いはじめた。

洞の中は あったかで、

ここより素敵なところはないよと

守りの人は 言ったけど

それはすっかり嘘だった！

ほら見てごらん あたしのおうち

立派で 綺麗で 暖炉付き！

誰が育ての丘まで 戻ると？

守られなくても 怖くはないの！

なぜなら今日

あたしはマウリンに なったから！

みんなは、この即興の歌に拍手を送った。それを見たチャルーが、ペニヤッツ酒を一气飲みした後、椅子に上った。

ポウに肉 それとペニヤッツ もうご機嫌

天井おどかし だからどうした

今夜は 踊って 食べるんだ

だが覚悟しろ お喋り女

ちよろい脅かし それよりもっと

いかした仕返し してやるぜ！

この歌に、マウリンは、せせら笑って、食事台上った。リリが、「ちよっと！」と言ったが、マウリンは聞いていなかった。

お耳がないの？ びびりやチャルー

あたしはなんにも 怖くはない

せいぜいいろいろ 考えなさい

けれど あたしにとっては ぜんぶ無駄！

あんたの作戦 ぜんぶばあ！

仕返しの歌 つまんなさすぎ

あくびが出ちゃって、もう眠すぎ

これには、チャルーも食事台にあがって、「おい、もういっぺん言ってみろ！」と怒った。

「歌ってかえしな 金の男 ずっと怒ってもううんざり あたしの中ではもう終わり」

クワーレンは、マウリンの勝利を心の中で確信した。けれど、本当の勝者は他にいた。

「いいかげん、椅子に座れ」

言ったのは、リリだった。クワーレンは、首をすくめた。チャルーでさえも、マウリンを睨みながら椅子に座った。マウリンも、目を細めて彼を睨んだ。

誰もが無言だった。楽しかった宴は、一気に険悪になった。

と、そこでリリの顔に怯えが走った。どうやら、また次の勝者が現われたらしい。彼女が見ているのは、クワーレンの背後だった。

恐る恐る振り返ると、そこには……

(嘘だろ)

階段の暗がり、保育部屋の宿敵、蜘蛛がいた。

クワールレンは、動悸がおさまらなかつた。冷たい脅威が、イムサのまわりを取り巻いていた。

（イムサが蜘蛛？ 蜘蛛がイムサだなんて！）

イムサは、ぎりつとみんなを見渡すと、ずかずかこちらにやってきた。そして、クワールレンの隣に、どっかり座った。それから、目の前のものを手当たり次第に食べ始めた。

クワールレンは彼の顔など見ることもできなかつたが、イムサの方もクワールレンを見ようとしなかつた。まるで、かつてのナッシュであると感じていないようだ。

やっと彼の横顔を見る勇気が出たクワールレンは、その理由がわかつた。

刈り上げた頭、鋭い吊り目、がっしりとした腕、威圧感があるが、蜘蛛の特徴である長い手足をしていなかった。

彼は、蜘蛛ではないのだ……。

とたん、安堵の汗が出てきた。それとともに、恐ろしい考えが芽生えた。

蜘蛛がいなくても、自分がどこかで蜘蛛に怯えている。その陰を、自分は育ての丘で捨ててこれなかつたのだ。

イムサは、食べ、食べ、食べ続けた。飢えた獣のように。

そんな彼へ行動をおこせたのは、エネーリス一人だけだった。彼女は、ペニヤツツ酒をホルトに注いで、彼に渡し、先に食事をしたことを詫びた。

イムサは、唸って返事をし、ごりごり喉を鳴らしてペニヤツツ酒を飲んだ。余っていた食べ物は、全部、イムサの底知れない胃袋へおさまっていた。

落ち着きのない食事を終えると、彼らは二階へあがり、部屋へ入った。

「だっせえ寝巻！」

右の部屋を使うことになった少年たちだったが、箆筒に入っていた寝巻に、チャルーは顔をしかめた。はたきたくなるような砂色だ。クワーレンも残りの一枚を掴んだが、目をこすりたくなるような、くすんだ青だった。イムサはというと、すでに上品な茶色の寝巻に着替えていた。

奥へ長いこの部屋は、三つの寝台と、間に簡素な小棚、奥の壁に箆筒と、手前に本棚があった。

クワーレンは、本棚の方の寝台を選んだ。イムサが奥を使っていたからだが、もう一つ、の理由として、大きな本棚が近くにあるからだだった。

『エィネー地名大辞典創成期編』『害獣猛獣百科事典』『河川の植物第五章毒性

植物の生態』と、見るのも嫌になる文字が、残り物のように置かれた本に書かれていたが、ここに自分の本が並ぶ日を想像すると、クワーレンは、わくわくした。

「おい、明かりを消すぞ」

寝台に立って石灯いしひの窓を閉めようとしたチャルーは、本を読んでいるイムサに声をかけた。ここにあった本か、それとも自分で持ってきたのか、とにかくイムサは、本から顔を上げず、何も言わなかった。

チャルーは舌打ちし、乱暴に窓を閉めた。けれど、イムサの傍の棚明かりがついていたので、完全には暗くならず、さらに彼は不機嫌になった。

クワーレンは、見習いになって、これからなにをしたいか彼に訊ねた。するとチャルーは、待ってましたと言わんばかりに、滔々と語りはじめた。「竜の卵を買って育てたい」とか、「穴を掘って、エイネーの反対にある影の地に出たい」とか、「イドウリの火山の石で、ポウを焼きたい」とか、考えれば不可能なことばかりだが、今の自分たちは何でもやれるような気がした。

チャルーの話を子守唄に、クワーレンは、眠りについた。エサルノア女王様や、抱えの木、中心部の明かりが目の裏に浮かび、やがて消えた。最後に残ったのは、「ナツシユ！」と呼ぶピクランタだった。

明日の朝、彼がいない部屋で目覚めるのは寂しかった。これからは、それが当たり前になるのだ。

マウリンの歌が思い起こされる。

なんにもあたしは怖くはないの！

それを杖に、クワールレンは初めての見習いの夜を過ごした。